



現代文明國ニ於ケル人口問題(4)

米田, 庄太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 10(4):595-616

(Issue Date)

1911-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051704>



現代文明國ニ於ケル人口問題 (其四)

京都文科大學講師

米田庄太郎

一、人口出生率減少問題、

- (1) 出生率減少ノ事實、
- (2) 出生率減少ノ原因、
- (3) 出生率減少ノ傾向ト人種改善政策、

二、都市集中問題、

- (1) 都市集中ノ事實、
- (2) 都市集中ノ原因、
- (3) 都市的淘汰作用、
- (4) 都市集中ニ對スル政策問題、

二、都市集中問題

(1) 都市集中ノ事實

余ハ本論文第一ノ人口出生率減少問題ニ就テ既ニ豫想外ノ紙數ヲ費ヤシタレバ、又此第二ノ都市集中問題ニ關シテハ我國ニ於テモ既ニ之ヲ論說セシ人々少ナカラザレバ、(近クハ日本經濟新誌第八卷第八號ニ於ケル永井氏ノ「地方農民ノ都市

集中ノ如キ、又柳田氏ノ趣味深キ新著、時代ト農政中ニ於ケル田舎對都會ノ問題ノ如キアリ、更ニ余自身モ昨年九月號ノ太陽ニ於テ此問題ノ幾部分ヲ論ジタレバ、茲ニハ主トシテ諸氏ノ論文中ニ見ヘザル點ニ於テ簡單ニ論述スルニ止メントス。

夫レ都市ハ文明ノ發現地ニシテ、都市ノ成立ハ文明ノ發生及ビ發達ノ根本的一條件ナリトス。而シテ又大體上文明ノ發達ハ都市ノ發達及ビ増加ニ伴ナフト云フヲ得可シ。是レ史上ノ事實ノ證明スル處ノモノナリ。サレドジャコビ氏ノ考ヘラルル如ク一國各地方ノ文明發達ノ程度ハ其地方ノ人口ノ密度殊ニ其都市人口ノ百分率ヲ標準トシテ之ヲ測定シ得ラル、程、兩者ノ間ニ密接ナル關係アリテ存スルヤ疑ハシ。同氏自身モ種々ノ例外ヲ認め、而シテ之ヲ説明セン爲メニ幾多ノ次等の因素ヲ設定セラレ、其内ニテ殊ニ人種的因素ヲ重セラレタリ。サレド氏ノ次等の因素ト稱セラル、モノハ果シテ悉ク次等のノモノト見ル可キモノナルヤ。是レ社會學上ノ大問題ニシテ輕々ニ論斷シ去ル可キモノニ非ラザルガ、トニカク文明ノ進歩ト都市的集中ノ間ニ存スル關係ヲ直チニ定量的ノモノト見做シ一ヲ以テ他ヲ測定セントスルガ如キハ穩當ナル見解ニ非ラザル可シ (Jacoby, L'Études Sur la Séle-

ction dans ses Rapports avec l'hérédité chez l'homme) 更ニ又コスト氏ノ企テラル、如ク此見解ヲ一層精練シテ絶対的人口、都市の人口及ビ兩者ノ關係ヲ基礎トシテ之ニヨリテ各國ノ社會的進歩ヲ比較的ニ測定スル合理的社會測定法 Sociométrie rationnelleナルモノヲ設定セントスルモ穩當ナラズト信ズ。左ニ氏ガ其社會測定法ヲ應用シテ得ラレタル結果ヲ掲ゲ、之ニヨリテ果シテ氏ノ測定法ガ合理的ナルヤ否ヤヲ示サン。

國名	絶對人口 指數	大都市集 中指數	兩者ノ積
グレート、ブリテン及 アイルランド	105	25	2625
北米合衆國 (但シ舊三 州ヲ含ム)	15	15	225
ジャーマニー (但シ普 ルシアヲ含ム)	15	10	150
歐洲	25	10	250
フランス	100	10	1000
プロシヤ	100	10	1000
イタリア	15	10	150
イギリス	75	10	750
日本	15	10	150
オースタリアハンガリー	107	5	535

國名	絶對人口 指數	大都市集 中指數	兩者ノ積
タールキ	5	4	20
ホランド	3	18	54
スウェーデン	5	3	15
ベルギー	16	7	112
デンマーク	6	16	96
ポルトガル	2	16	32
スウェーデンノルウエー	7	10	70
ルーマニア	14	4	56

Coste, Les principes d'une Sociologie objective, p. 174

右ノ表ニヨリテ見レバ社會的進歩ノ程度ニ於テポルトガルガスウェーデン

及ビノ一ウエーノ上ニ位シ、更ニターキーガホルランド、スペイン、ベルジヤム、デンマーク等ノ上ニ位スルコト、ナレリ。サレド之レ果シテ吾人ノ承認シ得ル處ノモノナルヤ。ターキーヲシテ此ノ如キ高位ニ置カザル可カラザルガ如キ社會測定法ハ決シテ合理的ノモノニハ非ラザル可シ。

サレバ都市ノ成立、發達及ビ増加ト文明ノ發生、膨脹及ビ進歩トノ間ニハ密接ナル關係アリテ存シ、又大體上兩者ハ相伴ナフテ發展スルモノナルハ疑フ可カラザル事實ナリトスルモ、而モ進ンデ此關係ヲ定量的ニ觀念シーヲ以テ他ヲ測ル尺度トナサントスルガ如キハ決シテ穩健ナル見解ナリト認ムルヲ得ズ。云フマデモナク定質的關係ガ定量的關係ニ化成サル、マデハ科學的眞理ノ確立ヲ主張スル能ハズト雖モ、而モ今日ノ精神學的學科ニ於テハ吾人ハ之ヲ試ミ得ルマデノ進歩ニハ達シ居ラザルナリ。

サテ上文ニ述ベシ如ク都市ト文明ノ間ニハ假令分量的ニ測定シ得ル程ニハ非ラズトスルモ、甚ダ密接ナル關係アリテ存スルコトヲ認ムルニ於テハ、都市發達ノ研究ハ社會學上及ビ文化史上甚ダ重要ナル又興味多大ナル問題トナルナリ。茲ニ

之ヲ詳論スルハモトヨリ其處ニ非ラズト雖モ、サレド其一般ノ形勢ニ注意シ置クハ都市集中問題ノ真相ヲ理解スルニ甚ダ便ナリト思ヘバ簡單ニ之ヲ論ジ置ク可シ。

サテ古代文明國ニ於ケル文明發展ノ地盤タリシ都市セベス、メンフィス、バビロン、ニテヴエ、スサ、エグバタナ等、ハ如何程大ナリシカ、其人口幾何ナリシカ、今之ヲ確知スルノ術ナシト雖モ希臘人ガ常ニ彼等ノ廣大ヲ嘆賞セシヲ思ヘバ、可ナリ大ナリシコトハ察スルニ餘アリ。而シテ希臘ノ都市ニ就テハ既ニペロツホ氏ノ如ク詳細密ナル研究ヲ試ミタル人アルニ係ラズ、Beloch, *Bevölkerung der griechisch-Römischen Welt* 其人口ハ確知スルコト難シ。人口十萬以上ノ都市幾多存在セリト説ク人アレド(例ヘバ Weber, *The Growth of the Cities in the 19th Century*)又人口二萬以上ノ都市ハ大都市ト見倣レタルモノニシテ十萬以上ノモノハ一ヶ處ダニ存在セシヤ疑ハシト論ズル人モアルナリ。(例ヘバ Thurnwald, *Stadt und Land im Lebensprozess der Rasse*)カ―セーシハ其盛時人口七十萬ニ達シ、アレキサンドリアハ五十萬又ハ七十萬ノ人口ヲ有セシコトアリ、更ニローマ都市ニハ人口十萬以上ニ達セシモノ多ク、ローマ

都市ハ六ケ處又ハ七ケ處ニ過ギザリシガ、同世紀ノ終リニハ十三四ケ處トナレリ。第十七世紀ハ宗教戰爭及ビ内亂ノ時代ナリシヲ以テ、殊ニ獨逸ノ如キハ之レガ爲メニ大打撃ヲ受ケタリシヲ以テ歐洲ノ人口總體ハ殆ンド停滯シ、大都市ノ數モ増加セザリキ。サレド都市人口ハ四割程ノ増加ヲ示セリ。而シテ第十八世紀ニ於テハ總體人口及ビ都市人口共ニ五割程ノ増加ヲ示シ、又大都市ノ數モ二十三ケ處トナレリ。更ニ第十九世紀ニ至テハ總體人口、都市人口及ビ大都市數等何レモ非常ニ増加セシガ而モ其始メト終リニ於テ大ナル差違アリ。今ズントベールヒ Sundbärg 氏ノ調査ニヨリテ同世紀ノ始メニ於ケル大都市ノ主要ナルモノ、人口ヲ示サンニ

ロンドン	一、〇〇〇、〇〇〇	モスクー	二五〇、〇〇〇
コンスタンチノブル	六〇〇、〇〇〇	ビーターズブルグ	二五〇、〇〇〇
パリ	五〇〇、〇〇〇	グイエーナ	二三〇、〇〇〇
ブリス	三五〇、〇〇〇	アムスターダム	二三〇、〇〇〇

而シテ獨逸ニ於テハ人口十萬以上ヲ算フルモノハ唯ベルリン及ビハムブルフノ二ケ處アリシノミニテマドリツド、リスボン、マイランド、ヴェネチア、パレルモ等ハ尙ホベルリンノ上ニ位シタリキ。ツマリ第十九世紀ノ始メニ於テハ南歐殊ニイ

タリ一ハ大都市國ナリキ。然ルニ之ヲ同世紀ノ終リ或ハ第二十世紀ノ始メニ於ケル狀態ト比較スルニ大都市ノ數、其人口數及ビ其分布ニ於テ著シキ變動ヲ見ルナリ。千九百年獨逸帝國統計ニヨレバ第十九世紀ノ終リ及ビ第二十世紀ノ始メニ於テ人口十萬以上ヲ有セル都市ノ數ハ歐洲ニ於テハ百五十ヶ處、北米ニ於テハ四十ヶ處、南米ニ於テハ十ヶ處トナレリ。更ニ亞弗利加ニ於テ六ヶ處、濠洲ニ於テ四ヶ處而シテ亞細亞ニ於テハ七十ヶ處アリ。次ニ特ニ人口五十萬以上ノ歐米ノ大都市ニ就テ其人口數ヲ示サンニ左ノ如シ。

英國(千九百年調査)

ロンドン 四、五三六、〇六三

グラスゴー 八九一、〇四八

リヴァプール 六八四、九四七

マンチェスター 五四三、九六九

バーミンガム 五二二、一八二

佛國(千九百年調査)

パリ 二、七一四、〇六八

マルセイユ 四九一、一六一

獨逸(千九百年調査)

ベルリン 一、八八八、八四八

ハムブルフ 七〇五、七三八

ミュンヘン 四九九、九三二

澳大利(千九百年調査)

グワイエンナ 一、六七四、九五七

匈牙利(千九百年調査)

ブダペスト 七二六、四七六

伊太利(千九百年調査)

フィブルス 五六三、五四〇

マイランド 四九一、四六〇

西班牙(千八百九十七年調査)

マドリッド 五一二、一五〇

露西亞(千八百九十七年調査)

バルセロナ	五〇九、五八九
ビーターズブルグ	一、二六七、〇二三
モスコ	九八八、六一四
ワルソ	六三八、二〇八
土耳古	
コンスタンチノブル	一、二二五、〇〇〇

ニューヨーク	三、四三七、二〇二
シカゴ	一、六九八、五七五
フィラデルフィア	一、二九三、六九七
セント、ルイス	五七五、二三八
ボストン	五六〇、八九二
南米	
アエノス、アイレス	八三六、三八一
リオデジャネーロ	八〇〇、〇〇〇

合衆國

更ニ最近ノ調査ニヨレバベルリン及ビヴイエンナノ人口ハ二百萬ヲ超過シ(千九百八年ノ調査)又其他ノ都市ノ人口モ一般ニ増加セリ。之ヲ第十九世紀ノ始メノ状態ト比較スルニ同世紀中ニ於ケル大都市ノ發達及ビ都市人口ノ増加ハ實ニ非常ニ大ナルモノナリシヲ見ルナリ。又第十九世紀ノ始メニ於テハ南歐ガ大都市國タリシニ反シテ同世紀ノ終リニ於テハ北歐ガ大都市國トナレルヲ見ルナリ。

以上簡單ニ主トシテ歐洲ニ於ケル都市發達ノ形勢ノ一般ヲ述ベタルガ更ニ左ノ二表ニヨリテ第十九世紀ノ始メヨリ近頃ニ至ルマデ歐米各國ニ於ケル都市人口ノ一國人口總體ニ對スル割合ノ變動ヲ示シ以テ都市人口發達ノ形勢ノ一般ヲ明ニセントス。第一表ハウエバー氏ガ詳細ナル研究ニ基ヅキテ作成サレタル表ヲ

短縮セルモノニシテ千八百九十年頃ヨリ千八百九十年頃ニ至ルマデノ都市人口百分率ノ變動ヲ示セルモノナリ。Weber, the Growth of the Cities in the 19th century, P. P. 144 & 145. 尙ホ千八百九十年以後ノ變動ニ就テモ余ハウエバー氏同様ノ研究ヲ試ミツツアルガ未ダ之ヲ簡單ナル圖表ニテ示シ得ル程ノ結果ニ達シ居ラザルヲ以テ已ヲ得ズ、千九百六年及ビ同十年ノ獨逸帝國統計年鑑ニヨリ千八百九十年以後歐米諸國ニ於テ農業林業及ビ漁業ニ従事スル人口ノ總人口ニ對スル百分率ノ變動ヲ示ス表ヲ作成シ、之ニヨリテ讀者諸君ヲシテ同年以後ノ都市人口發達ノ大勢ヲ推察セシメントスルナリ。但シ田舎人口ト農業人口トハモトヨリ同一視ス可キモノニ非ラズ、此點ニ就テハギユイユー氏モ詳シク論述サレタリ。(Guillon, L' Emigration des Campagnes vers les Villes, 1905, Introduction) 併シ農業人口ハ田舎人口ノ大部分ヲ占ムルモノナレバ、之ニ林業及ビ漁業人口ヲ合セテ考フルトキハ大體上田舎人口ノ大サヲ窺知スルニ難カラズ。而シテ田舎人口ノ相對的變動ハ其裏面ニ於テ都市人口ノ相對的變動ヲ暗示スルモノナレバ第二表ニヨリテ千八百九十年以後ノ都市人口ノ相對的變動ノ一般ヲ察スルヲ得ルナリ。

第一表 歐米諸國ニ於ケル都市人口ノ總人口ニ對スル百分率

調査年度	千八百十年		千八百五十年		千八百九十年	
	人口二萬以上ノ都市ニ住スルモノ	人口一萬以上ノ都市ニ住スルモノ	人口二萬以上ノ都市ニ住スルモノ	人口一萬以上ノ都市ニ住スルモノ	人口二萬以上ノ都市ニ住スルモノ	人口一萬以上ノ都市ニ住スルモノ
イギリス	一八〇二	一六九四	二二〇〇	一八五一	一八九一	五三五六
フランス	一八〇一	一三九	一七〇	一八五一	一八九一	四二四
ドイツ	一八〇〇—一八〇一	八七	一三五	一八四六	一八九〇	三六八
オーストラリア	一八二五	七七	八九	一八四九	一八九〇	二六一
ベルギー	一七九五	二四五	二九五	一八四九	一八九〇	三〇〇
イタリア	一八二六	六〇	七三五	一八四九	一八九〇	二九三
スペイン	一八〇〇	三八	三八	一八五〇	一八九〇	二四九
ポルトガル	一八〇二	六七	九五	一八五一	一八九〇	二二九
デンマーク	一八〇一	一〇九	一〇九	一八四〇	一八九〇	二二
スウェーデン	一八二〇	九七五	一四〇	一八五七	一八九七	二〇二
アイスランド	一八〇二	人口十萬以上ノ都市ニ住スルモノ	一八四四	人口十萬以上ノ都市ニ住スルモノ	一八九一	一八〇
アイスランド	一八〇〇	六六	七八	一八五二	一八九一	一五三
キヤナダ	—	—	—	一八五二	一八九一	一四二
チリ	—	—	—	—	一八八五	一四三

ノルウェー	一八二	—	三三	一八四五	四二	五三	一八九〇	一三八	一六七	三三
スイツアランド	一八三	一三	四三	一八五〇	五二	七三	一八八八	一三三	一六五	—
オーストリア	一八〇	三五四	四三七	一八四三	四二	五八	一八九〇	一三〇	一五八	三五
ハンガリー	一八〇	二二二	五五五	一八五〇	四五五	九一	一八九〇	一二六	一七六	—
ルーマニア	—	—	—	—	—	—	一八九一—一八九〇	一〇七	一四二	—
ギリース	—	—	—	—	—	—	一八九九	九〇	一四〇	—
スウェーデン	一八五	三〇	三九	一八五〇	三四	四七	一八九〇	一〇八四	一三七四	一八〇
ポルチユガル	一八二	一〇三	一二七	一八五七	一〇七	一二九	一八九〇	九三	一二七	—
ブルガリア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アラジール	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ルシニア	一八〇	二四	三七	一八五六	三五	五三	一八八八	八七	一〇二	—
セルビア	—	—	—	—	—	—	一八九〇	二五	五一	—
ボスニア	—	—	—	—	—	—	一八八五	七三	九三	—

第二表 歐米諸國ニ於ケル農業林業及ビ漁業ニ従事スルモノ、總人口ニ對スル割合ノ變動

獨逸	一八八二	四三・四	一八九五	三七・五	一八八八	五八・三
澳太利	一八九〇	六四・三	一八九〇	五八・二	一八九一	四〇・〇
匈牙利	一八九〇	七一・〇	一八九〇	六九・七	一八九〇	四一・八
露西亞	一八八八	五八・三	一八八一	五六・七	一八九〇	五九・四
伊太利	一八八一	五九・四	一八八八	三七・四	一八九〇	三〇・九
瑞西	一八八八	三七・四	一八九〇	三〇・九	一八九一	四〇・〇
佛蘭西	一八九一	四〇・〇	一八九六	四四・三	一八九〇	四一・八
白耳義	一八九〇	四一・八	一八九〇	二二・九	一八九〇	二二・九

和	蘭	デンマーク	瑞	諸
一八八九	一八九九	一八九〇	一八九〇	一八九一
二二・一	三三・七	四八・二	四九・八	四一・〇

英	威	蘇	愛	合
蘭	耳	格	蘭	衆
土	斯	蘭	土	國
一八九一	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一九〇〇
一〇・四	八・八	一四・〇	四四・〇	三五・九

終リニ我國ニ於ケル都市發達ノ現況ヲ考フルニ統計學雜誌第二百八十八號ニ於テ矢守專助氏ハ「全國都市發達ノ狀況」ト題スル一文ヲ公ニシ、明治三十六年ヨリ同四十一年ニ至ル五箇年間ニ於ケル全國都市人口ノ増殖程度ヲ調査サレタルガ氏ノ調査ニヨレバ最高増殖歩合ヲ示セルモノハ横須賀ニシテ實ニ九十二パーセントナリトス。之ニ次デ豊橋、吳、門司、佐世保、青森、神戸、名古屋、宇都宮等ハ何レモ三十パーセント以上又東京、大阪、横濱等ノ大都市ハ何レモ二十パーセント以上ノ増殖歩合ヲ有シ、而シテ仙臺、奈良、尾ノ道、丸龜、小倉等ヲ除ケバ全國何レノ都市モ皆ナ多ク少ク増加ヲナセリ。サレバ全國都市人口ノ増加歩合ハ十九パーセントニシテ全國

人口平均増加歩合六、パーセント」ニ比シテ實ニ三倍餘ノ高歩合ナルナリ。之レニヨリテ我國ニ於ケル人口分配ノ變動モ亦歐米諸國ニ於ケルト同一ノ方針ニ進ミツツアルコト明白ナリトス。

サテ上文述べ來リシ處ニヨリテ、現代文明國ニ於テ大都市ノ盛ニ發達セルコト及ビ都市人口ノ著シク増加セシコトヲ示セルガ、今進ンデ先ヅ其直接原因ヲ探求センニ、純理論的ニ考フレバ此原因ニ二種アリ得ルコトハ明カナリ。一ハ都市人口ノ自然的増加即チ都市人口ニ於テ出生率ノ死亡率ニ超過スルコトニシテ、二ハ都市移住即チ田舎ヨリ都市ヘノ移住ナリ。サレド實際上果シテ此等ノ二原因ガ相共ニ作用スルヤ、若シ然リトスレバ彼等ノ效力ノ關係ハ如何、兩者同等ノ效力ヲ有スルヤ或ハ一ハ主ニシテ他ハ從ナルヤ。

一時都市移住ハ第十九世紀特有ノ現象ナルガ如ク考ヘラレタルガ、サレド其後ノ研究ハ斯見解ノ眞實ナラザルヲ證シ、都市移住ノ傾向ハ時代ニヨリテ強弱大小ヲコソ異ニスレ往古ヨリ常ニ存在セルモノナルヲ明ニセリ。羅馬帝國時代ニアリテ此傾向ノ如何ニ大ナリシヤハセテカノ書簡中ノ文句ヲ引用シテ之ヲ證明セル

人々モ少ナカラザルガ、更ニ夫レヨリモ遙カニ以前ニ此傾向ニ存在セルヲ證スル
文書の證明アリ。之レホーマーノ詩中ニ見ユルユリズノ言ナリ。ギユイユー氏ハ之
ヲ以テ昔シヨリ都市移住ノ存在セシコトヲ示ス。最モ貴重ニシテ又最モ古キ文書
的證言ナリト云ヘリ。而シテホーマー詩中ニアルユリズノ言トハ左ノ如キモノナ
リ。

都市ハ田舎ヨリモ多クノ機會ヲ余ニ與フルナラン。田舎ニアリテハ唯一ノ生
活手段アルノミ。此處ニハ絶ヘザル勞働ノ外何物ヲモ望ム能ハズ。而モカ、ル
勞働ハ余ノ堪ユル能ハザルモノナルヲ余ハ斷言スルニ憚カラズ。然ルニ都市
ニ於テハ多クノ機會アリテ存ス。而シテ人若シ多少ノ精神ト經驗ヲ有センニ
ハ僅少ナル歲月間ニ於テ多年田舎ニアリテ身ヲ勞スルヨリハ遙カニ大ナル
成功ヲ得ルコト稀レナラズ。云々 Guillon, L' Emigration des Campagnes vers Villes, Intr-
oduction.

ギユイユー氏ハ更ニ中世紀ノ佛國ニ於ケル此傾向ノ大ナリシヲ詳シク説カレ
ビユヒアー氏ハ主トシテ中世紀ノ獨逸ニ就テ此傾向ヲ論ジ第十四世紀及ビ第十

五世紀ニ於ケル移住運動ハ第十九世紀ノ夫レニ比ス可キモノナリトマデ云ハレタリ。Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft. 而シテ近世ニ入りテハ既ニ重農學派ノ學者ハ都市移住及ビ之ニ伴ナフ田舎人口ノ減退ヲ憂ヒ且ツ此傾向ノ永キ以前ヨリ存在セルヲ説ケルガ(L'Encyclopédie 中ニアル Quespayノ論文 Fermiersヲ見ヨ)而モヤ、確實ナル事實ニヨリテ始メテ之ヲ證明セルモノ、一人ハ政算術ノ創說者ジヨン、グラウント氏ナリトス。氏ハロンドンノ出生證書及ビ死亡證書ヲ調査シ之ヲ基礎トシテ政算術ト稱スル新學問(即チ今日ノ人口學ノ始メ)ヲ建設セント企テタル最初ノ一學者ナルガ、其著 Natural and political Observations made upon the Bills of Mortality, 1665. ノ中ニ左ノ如ク云ヘリ。

次ニ觀察ス可キハ此等ノ證書ニ於テ埋葬ハ洗禮ヨリモ遙ニ多キ事實ナリ。今此事實ノミニヨリテ考フレバロンドンノ人口ハ、減少シツ、アル可キ筈ナリ。然ルニ實際ハ之ニ反スルコトハ新シキ家屋ガ日々ニ増加スルコト及ビ廣大ナル家屋ガ小サキ「テネメント」ニ轉化サル、コトヲ見テ明カ也。サレバロンドンハ外部ノ田舎ヨリ人口ノ供給ヲ受クルモノナルコトハ疑フ可カラズ。ロン

ドンハ此供給ニヨリテ管ニ上ニ述ベシ埋葬ノ過剩ヨリ生ズル缺陷ヲ補フノ
ミナラズ又上ニ述ベシ家屋増加ノ事實ニヨリテ知ラル、如ク其住民ヲ増加
スルナリ。Chapter VII.

然リ而シテ此死亡超過ノ事實ハ其後永ク繼續シタレバ都市ノ發達否ナ其維持
スラ全然田舎ヨリノ移住ニ依屬セシハ疑フ可カラザル事實ナリ。サレバ都市人口
ノ自然的増加ナルモノハ全ク不可能ニシテ其維持發達ハ一ニ田舎ヨリノ移住ニ
依ルモノナリトノ思想ハ一般ニ行ハル、コト、ナレリ。而シテ此一般的思想ニ感
化セラレ數多ノ事實ト又種々ノ理論ヲ根據トシテジャコビ、ハンゼン、アムモン等
ノ諸氏ノ新說現レ出タリ。ジャコビ氏ノ說ニ就テハサキニ本論文其二ノ中ニ少シ
ク述べタレバ此處ニハ省キ、唯ハンゼン及ピアムモン二氏ノ說ニ就テ一言スルニ
止メ置カン。

ハンゼン Hansen 氏千八百八十九年ニ Die drei Bevölkerungstufen. Ein Versuch, die Ursa
chen für das Blühen und Altern der Völker nachzuweisen ト題スル有名ナル一書モ著ハサレ
ルガ其主意ハツマリ都市ノ人口ハ常ニ死滅スル傾向ヲ有シ、田舎人口ニヨリテ補

充サレザレバ持續スル能ハザルコト、上中下ノ三社會階級ハ一般ニ信ゼラル、如ク相竝ンデ流レユク獨立ナル河ニアラズシテ田舎ヨリ發出スル人口ノ一流ガ發展スル諸階段ニ外ナラザルコト、都市ニアリテハ此等ノ移住者ハ漸々淘汰セラレテ諸社會階級ニ分レ而シテ此等ノ階級ノ上位ニアルモノニ於テハ種々ノ理由ニヨリテ家族ハ迅速ニ滅亡スルニ至ルコト等ヲ論證シテ結局都市ハ人類ノ盡食者ニシテ絶ヘズ田舎ヨリ新シキ人肉ノ供給ヲ受クルニ非ラズンバ持續スル能ハザルモノナルヲ主張スルニアルナリ。

アムモン Ammon 氏ハ千八百九十三年ニ著ハサレタル Die natürliche Auslese beim Menschen 及び千八百九十五年ニ著ハサレタル Die Gesellschaftsordnung und ihre natürlichen Grundlagen 等ニ於テハンゼン氏ト同ジク都市ガ一國人口ノ盡食者ナルコトヲ稍々異ナレル方面ヨリ論證セント企テラレタレド茲ニ之ヲ紹介スルノ暇ナケレバ唯其主要ナル著作ヲ示スニ止メ置ク。

然ルニ今此等三氏ノ如ク都市人口ノ自然的増加ノ不可能ヲ極端ニ主張スルニ於テハ之ニ對スル反動ノ起リ來ルハ自然ノ勢ナリトス。サレバククチンスキ Kuc-

zynski氏奮然トシテ立チ此思潮ニ反抗ヲ試ミタリ。氏ハ千八百九十七年ニ *Der Zug nach der Stadt*ト題スル一書ヲ著ハシ、ハンゼン及ピアムモン二氏ガ其主張ノ根據トセル統計ニ對シテ批評的破壊的分析ヲ試ミ、都市人口ガ自力ニヨリテ復活スル力ナキヲ證明スルニ用ヒラル、事實ノ正確ナラザルヲ指摘シ、殊ニ近來都市的衛生ノ發達ニヨリテ都市生活ハ田舎生活ト同様ニ健康及ビ長壽ニ適スルモノトナリツ、アレバ都市ヲ以テ永久ニ人類ノ盡食者ナリト見ルハ一種ノ偏見ニ外ナラザルコトヲ論破セリ。

サテ今事實ニ基ヅキテ公平ナル考察ヲ下サンニ歐洲ノ大都市中第十八世紀ニ於テ既ニ自然的増加ノ狀態ニ達セルハ唯佛國ノパリノミニシテ他ハ何レモ第十九世紀ニ入ルマデハ此狀態ニ達スルヲ得ザリシガ如シ。ルヴァアサール *Levasseur* 氏ノ調査ニヨレバパリハ既ニ第十八世紀ノ中頃ヨリシテ自然的増加ヲ確立スルニ至レルガ如シ。左ノ表ハ此事實ヲ示スモノナリ。

出生超過

一七五〇—一七五九
一七八〇—一七八九

三三三
二七

一七九九—一八〇八
一八〇九—一八一六

六六八(之レハ死亡超過ナリ)
三七三
La Population Francaise, Tome II, p. 395.

サレドバリ人ニハ其兒童ヲ田舎ニ託シテ養育セシムル風習アルヲ考フルトキハバリモ果シテ第十八世紀中ニ自然的増加ノ状態ニ達セシヤハ疑ハシ。蓋シカ、ル風習ノ行ハル、ヨリシテ出生ハバリニ於テ登録セラレ而シテ死亡ハ田舎ニ於テ登録セラル、ト云フガ如キ場合ヲ生ズレバナリ。ロンドンハ第十九世紀ノ始メニ至ツテ漸ク自然的増加ヲ確立シタルモノニシテ夫レ以前ニ於ケル死亡超過ノ状態ハ左表ノ示スガ如シ。

第十七世紀間ノ疫病歳ニ於ケル死亡超過

一五九三	一三、八二三
一六〇三	三七、二五三
一六二五	四七、四八二
一六三六	一三、八三七
一六六五	八七、三三九

第十八世紀ニ於ケル毎年平均死亡超過數

一七〇〇—一〇	五、八三八
一七四〇—五〇	一〇、八九五
一七九〇—一八〇〇	一、六六五

Encyclopedia Britannica, Ninth Edition, Vol. XIV, "London."

ククチンスキ氏ハ其著Der Zug nach der Stadt, 二百五十二頁ニ於テ千七〇九年ヨリ千八百九十五年ニ至ルベルリンノ人口運動ヲ示ス表ヲ擧ゲラレタルガ、此表ニヨレバベルリンハ千八百十年ニ至ルマデ自然的増加ヲ確立スル能ハザリシガ如シ而カシテ第十九世紀ノ半以後ハ一般ニ自然的増加ノ割合ハ増加シ都市ノ發達上

自然的増加ハ重要ナル一原因トナレルガ如シ。殊ニロンドンノ如キハ千八百五十年以後ハ自然的増加ハマスマス主要ナル原因トナレリ。サレバウエバー氏ノ如キハ都市ノ近世的増長ノ因テ以テ起レル方法ハ田舎地方ヨリノ移住ノ増加ヨリハ寧ロ都市人口其レ自身ノ一層大ナル自然的増加ナリト論結セラレタルナリ。Weber, *The Growth of the Cities in the 19th Century*, p. 283.

余モ亦第十九世紀ノ後半期ニ入リテヨリ以後ハ都市ノ發達上自然的増加ノマスマス重要ナル一原因トナレルコトヲ認め、更ニ今後マスマス其重要ヲ増大スルモノナラント信ズ。サレド都市ガ其人口ノ自然的増加ニヨリテ自カラ其人口増加ノ四分ノ三或ハ其レ以上ヲモ供給スルハ殆ンド英國ノミニ限り其他ノ歐洲ノ都市ニアリテハ殊ニ佛國及ビ伊太利ノ都市ニアリテハ田舎ヨリノ移住ハ尙ホ主ナル原因ニシテ獨逸ニ於テモ自然的増加ノ因素ガマスマス發達シツ、アルニ係ラズヤハリ田舎ヨリノ移住ハ主要ナル因素タルガ如シ。而シテ今後大都市ノ自然的増加ガマスマス増大スルニ於テハ外來者ヲ包容スル力ハマスマス減ジ、其發達ハ主トシテ其自然的増加ニヨリテ行ハル、ニ至リ、隨フテ從來ノ如ク田舎ヨリノ移

住ガ主トシテ大都市ニ向テ集中スル傾向ハ漸々衰退スルナランガ併シ之ニ反シテ中小ノ都市ニシテ發達可能力尙ホ大ナルモノニ向テ集マル傾向大ニ強マリ來ルナラント信ズ。何レニシテモ余ハ第十六世紀ヨリシテ漸々發展シ來レル現代文明ノ精神ハ田舎人ヲシテ漸々都市ニ集中セシムルモノ、タトヘ種々ノ事情ニヨリテ實際都市ニ移住スル能ハザルモノニ於テモ少クモ田舎生活ヲ以テ満足セズ都市ヘ移住セントスル念ヲ發達セシムルモノト信ズ。サレバ余ハ都市移住ヲ以テ特ニ第十九世紀及ビ第二十世紀ニ固有ナル現象ト見ルガ如キハ大ナル謬見ナリト思ヘド、而モ何人モ其生レタル田舎ニ生活スルコト耳セズシテ少クモ都市生活ヲ憧憬スル念ヲ貯ヘ而シテ都市生活ニ對スル此一般的憧憬心ヨリ發出スルモノト云フ點ニ於テ現代文明國ニ於ケル都市集中ノ傾向ハ現代文明ノ精神ノ產物、現代文明國ニ特有ノモノナリト考ヘ次ニ此見地ヨリシテ現代文明國ニ於ケル都市集中ノ原因ヲ考究セントスルナリ。